

|||||
 近況・随筆
 |||||

輸入野菜と健康

井内 昇

最近スーパーやデパートの食品売り場では、色とりどりの果物や野菜がところ狭しと並べられている。果物ではすでにおなじみの外国産に加え、従来余り見かけなかった珍しい異国の品々が目につく。一方、このところ野菜も輸入品が急増しているのだが、こちらは案外知られていないようだ。これまで少量の輸入はされていたようだが、この数年は、円高、保存・冷蔵技術の発達、需要の多様化その他の理由で輸入量や種類の増え方は目ざましい。この需要増加の背景に近年のグルメブームがあることはいうまでもなからう。GATT協定に基づく米輸入の自由化の合意成立の結果日本の稲作農業に予想される変化は、本誌読者にはすでに周知の事実である。だが、野菜の輸入急増が日本の野菜農業の今後にどんな意味を持つのかは案外論じられていない。

ところで輸入急増と言っても一体どれくらい増えているのだろうか。手元の乏しい統計資料だけから云えることは限られるが、例えばNHK番組で見た数値では、1994年の輸入量は全国生産量の約5%に当たる65万トンで、1989年当時の輸入量は約20万トンであったから、僅か5年で3倍以上に増えている。一方、日本国勢図会'94～'95の表から集計すると、1993年の輸入量は70万9000トン、全国生産量は1373万9000トンで輸入の割合は5.2%となり、5%前後と見て大きな誤りは無さそう。ただ、「食料需給表」の自給率データに依ると、1988年の日本の野菜の自給率は91%だから、単純に残りの9%を輸入と見なせばこの5%との食い違いは大きいし、後述の新潟日報社記事で引用されていた10%という数値の信頼性にも関わってくる。(この点につきご教示くださる方がいらしたら幸いです)

このように輸入野菜の比率は必ずしも定かではないが、いずれにしても輸入量と種類がかなり急速に増え続けていることが事実である以上、輸入野菜の増加が我々にとってどういう意味を持つのか考えて見るのも無駄ではあるまい。先ず考えられるのは、米の場合と同じく日本の野菜農業の空洞化を招く危険があるのではないかと、という至極当たり前の疑問である。野菜農家はもとより、米の

自由化対策として今後多くの米作農家が農業経営の重点を野菜農業へ移そうとしている中で、野菜輸入がさらに拡大して行けばこれら農家の計画の前提が崩れ、さらに多くの農家の脱落を招く危険は十分に考えられる。それは、酪農家や果樹栽培農家がすでに通ってきた道でもあるが、一方、牛肉や果物の自由化が消費者の食生活を豊かにしたこともまた事実である。最近イギリスを訪れるたびに実感するのは、食料品が豊富かつ安価になっていることであるが、これがEC(現EU)の共通農業政策に基づく農業共同市場構築の成果であることはいうまでもない。ロンドン大学のヘバート先生は、某日この話題に及んだ時、私に“イギリスは今や食料を自給出来るようになったからだ”と説明してくれたが、それはイギリスという国を超えEUで捉えてはじめて言えることであらう。

だが、このような各国からの野菜の輸入品の洪水は消費者の立場から100%歓迎してよいのだろうか。穀物や肉、果物と比べると、野菜は1人1日あたりの摂取量が293グラム(1992年度)で日本人が最も多く食べる食料であるから、食料が我々の健康に与える影響という点からもよく考えてみる必要があるだろう。昨年9月新潟に旅行した時、地元の有力紙『新潟日報』9月2日朝刊社説「振り向けば野菜まで空洞化？」に興味深い記事が出ていた。この社説は全体の80%位を割いて野菜輸入増加による野菜農業の空洞化を論じたあと、“三里四方の野菜を食べていると病気になる”という古くからの言い伝えと共に、その土地に出来たものを食べることによって私たちの体は守られるという意味の“身土不二”という言葉を紹介している。現在我々は無意識のうちに世界中の食料を口にしており、もはや一国の土地で生産された食料だけで生きることは不可能であろう。しかし私はこの記事から、遠くは「近代医学の祖」・「環境論の祖」とされるギリシャ時代の医聖ヒポクラテスの健康論“空気、水、場所について”を思い出さざるを得ないし、近くは旅行に行く身内に年寄りか“水が変わるから体に気を付けなさい”とアドバイスしたという話を思い出して納得するのである。